

ひまわり便り

愛の絵手紙発見



「春の小川はさらさら流れ・満州も又内地も良い春になりました。」と、満州から故郷を思う愛の絵手紙が届いていた。一関市千厩町出身、茨城県在住の山口紀代子さんが大事に持っていた。もう1通は、ソ連に抑留されてからのもの「何もわからぬ子供らにこんなにまでされるかと思うと嬉しくて自然に臉があ



つくなるを覚えます」と、3人の子供達が父の無事帰還を祈つて小さな手を合わせている姿を描いている。家族との深い絆、愛情が伝わる。2通ともカザフスタンで亡くなられた伊藤庄平さんから、妻時子さん宛の絵手紙である。3人姉妹の長女、山口さんは「亡き母から受け継いだものです。貴重な形見として大切にしています」と話していた。

第5号
2016.1.1
全国強制抑留者協会
岩手県連合会

賀春

全国強制抑留者協会
岩手県連合会会長

菅原 義三

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましてはご健勝にて新年をお迎えることとお慶び申し上げます。昨年は戦後70年の節目の年を迎えました。日本はもとより世界の各地で記念行事が行われました。本会も慰霊祭やシベリア抑留を語り継ぐ集いなど、会員の皆様のご協力により盛会に開催することができました。あらためてお礼を申し上げます。風雪70年、国の内外ではいまだ多くの問題を抱えています。特に戦争にまつわるニュースは毎日、絶えることがありません。シベリア抑留経験者も高齢となりました。歴史は、後世に引き継がれてこそ事実として存在するものと思えます。非戦の誓いをあらたに、本年も引き続き平和への願いを込めた活動を続けたい覚悟です。是非、今後ともご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。皆様の益々のご多幸とご繁栄を心よりご祈念申し上げます。

平成二十八年 元旦

学徒動員

川崎の大空襲

奥州市 佐々木 正

3月10日の東京大空襲の後も毎夜半になると空襲警報が出た。その都度寮外に避難しないと統導教官に叱られる。仕方なく外に出るとサーチライトに照らされたB29の機影が北の方に流れて行った。遠く東京の空が赤く焼ける夜もあれば、何事も無く警報が解除される晩もあった。川崎に動員されて3カ月半、儀式のように繰り返される毎夜の警報は全く迷惑そのものであった。それも一晩に1回とは限らない。

「またかよ」いつもの様に寝間着のまま外に出て、仲良し3人が防空壕の入り口に立った。教官が2人、周りには俺たち同級生に一般の人も集まって賑やかな時を作っていた。突然前方に照明弾がさく裂した。見渡す周囲が真昼より明るく浮かび上がり、ゆっくり元薄暗さに戻った。敵の爆撃下準備である。教官に怒鳴られ先に入っ

たので最も奥に押しやられた。真つ暗闇の中しばらくして豪内が静かになつた。N君が「皆出たらしいぞ、人がいないよ、出よう」外は寮の近くまで燃えていた。

もう既に同級生はふくらんだリュックを背負い、「師範の生徒は、これから非難する」と号令がかかっていった。急いで二階に上がる。部屋の中は火明かりで怪しく照つていて。着替えをし、手当たり次第リュックに詰め、寝間着をかぶって外に出た。3人は先の豪に来たが、他の同級生は見えない。

必死にわが子と呼ぶ母親の金切り声が交差する。高射砲が地響きたてて発砲する。こんなに近くに高射砲があつたのか。多くの人はあてもなく前の人の後に続く。燃え盛る火を潜り抜ける為、寝間着、手ぬぐいを田の水に浸し身にまとう。「きたぞー」誰かの声がする。

突然に両手で顔を覆い地面に伏す。線路の砂利の上だ。「自分も16で終わるか」そんな思いだけが頭をかすめる。頭上で焼夷弾の束がはじけた。黒い薪が落ちてくる。逃げ回って避ける。寝間着の裾が燃えているのも知らず、うずくまっている老婆を逃がしてやる。貨車も燃え始めた。何度地面に伏しただろうか、その都度に頭上をかすめる爆弾の金属音を聞く。左手前方に油脂焼夷弾が落下、さく裂した炎の飛沫が盛岡中学の宿舎に降りかかり忽ち猛火に包まれた。校庭らしき所に移る。

突然B29が巨大な姿で煙の下を這うように過ぎる。おまけに機銃掃射のおとが耳をつんざく様に響く。「隣が死んだぞ」。H君の声に怯えてそこを立ち去る。見渡す限り火の海と煙だ。歩けば脚に電波妨害のアルミテープが絡まる。ただ歩く。此処は何処だろう。市街地に空いた小さな田園地帯のようだ。住宅地からは離れた。リュックを肩から外し、ようやく腰を下ろす。

爆撃は終わつたらしい。どうかこの空き地が煙を避けてくれた。徐々に安堵感が出てきた。時おり上空に放たれるサーチライトに目を走らせながら夜の明けのを待った。この夜、川崎と鶴見全城が焦土と化したのである。そして昭和20年4月15日の朝がきた。同じこの時、近くの先輩7名と教官1名が爆弾の直撃を受けて死亡した。悲しい夜であった。

活動報告

●シベリア抑留関係者中央慰霊祭 9月28日東京の都市センターホテルで開催された。全国から約300名ほどの参加者があつた。岩手県からは菅原会長以下4名が出席した。

●第2回慰霊祭実行委員会 11月7日に開催した。慰霊祭とシベリア抑留を語り継ぐ集いの決算を協議した。決算内容は、次号で報告する。



編集後記

梅が香に
追ひもどさるる
寒さかな
芭蕉

▼「梅が咲いても、即、春がくるものでもない。寒さの戻りもある」旅を楽しむ芭蕉の羨ましい悩みだ。
▼真冬の我が庭の梅は、つぼみさえ見せない。それでも正月に飾る梅は、新年を迎えるにふさわしい新鮮さを感じさせる。
▼「忍耐」「厳しい美しさ」の花言葉がある。この時世を生きる知恵にでもと・・・今年も良いお年になりますように。

連絡先
〒023-0063
岩手県北上市
九年橋3-19-5
全抑協岩手事務局
菊地 運
Tel.090-3125-2711
原稿募集

第4話

私のシベリア

奥州市 松浦 竹治

劣悪な食料

何から話せば体験記に

なるのか私の能力ではとても無理だが、シベリアと言えば寒さはある程度想像できても、飢えはちよつと考えられない。その立場になつてみなければわからない。広大なシベリア、ウクライナ地方など全国で2000ヶ所と言われ、割合暖かいところがある。私のいたタイシエトは北緯56度、マイナス60度にもなる場所、冬は長く9月中旬ごろに雪が降り5月中旬まで続く。午前10時ごろに太陽が顔を出す。午後2時ごろには沈む。夏は短い40度ぐらいになることもある。6月初めから8月中旬ごろまでと言われている。

それに燕麦、高粱が多かった。ある日モミを飯盒1杯で、口が痛くて大変だった。その他、砂糖が18グラム、マツチ3本、肉、魚だった。全てソ連内務省の捕虜給与規定等で決まっているようだったが全然守られていない。彼らも貧しい生活なので、どこかでカットされたのだと思う。食べられるものは何でも食べた。動物から草まで名は知らないものが多い。食料とノルマは関係を持つており、ノルマが達成できないと減量となる。シベリアには大河が多く私のいたタイシエトにはヘニセイ川の支流がある。

も何か贈ったり贈られたりで、命の恩人との交流は忘れがたく続いている。パンを分ける作業は重要な役割である。真ん中のテーブルを使うのだが、はかりなどもない。上から、みんなが注視している。60人分となると、3キロの黒パン7本を公平に分ける。普通だと、端はいらぬが、腹持ちが良いと言つて、硬い端のほうを好むのである。350グラムずつである。受け取るにも上官が先と



鉄道の作業

もあつた。私は一度もパン切りをやつたことがない、と言ふより不器用でやらされたことかかない。厳しいノルマ シベリア鉄道は9400キロといわれている。それを複線にするという。ロシアが極東、日本海に出口を作る第2シベリア鉄道建設というものである。労働の種類は何千冊にのぼる本が出されている。私は伐採作業が中心であつた。年中凍土の中で、カラ松、トド松、シラカバが混じり、根元が切れないうちに、おれることもある危険な作業だ。人跡未踏の山奥での作業の厳しさは、文字で表すことが難しい。1人いくらというノルマ作業量があり、2人1組で気の合う人であればよかつた。

若い人、特に白系には美人が多い。7人に1人という監視兵だが、人がよく、私たちと一緒になつてダンスなどを楽しんだ。燕麦の収穫作業、パレイシヨ堀りなど、収容所から離れた集落に出かける。コルホーズは楽しい思い出の一つである。



小麦の収穫作業

体験談 シベリア抑留を語り継ぐ集い

拾った命 世のために

盛岡市 高橋 清光

昭和17年6月、父母の反対を隠して陸軍軍属として満州581部隊に入隊した。そこでは防毒被服面の機密検査をして

た。20年4月、孫呉工兵123連隊に転属し入隊した。8月13日、中隊長命令。堀内分隊長から「高橋、堀崎、金（朝鮮人）、金村の5名は、ソ連戦車爆破特別肉攻隊を命ずる。但し無理して尊い命を捨てるな。一人でも生きかえって情報を中隊長に報告せよ」というものであつた。

私は「軍隊手帳に8月13日特別肉攻隊として出発す。父さん、母さんさようなら」と記した。暗夜、ソ連戦車に5メートル前で発見され銃撃を受けた。5名は近くの沼に飛び込んだ。頭だけ出して数百メートル歩いて命を拾った。20年9月、ソ連の捕虜となり、シベリアのブラゴエチェンスクの収容所

に入った。

捕虜は約1000人。この内300人が朝鮮人だった。ここで朝鮮人から「日本は朝鮮を占領し、朝鮮人を虐めてきた。又シベリアまで抑留された。何でこんなことをするのか。日本人が悪いからだ。ここで謝れ」と何度も言われ続けた。それを見たソ連の収容所長は、約3ヶ月で朝鮮人をどこかへ移動した。

農場ではバレイシヨ堀の作業だった。そこでは、日本兵とドイツ兵と左右に分かれて作業をした。警備兵が見えないときドイツ兵が来て手真似で「日本に世界一美しい富士山がある。この目で富士山を見たい」と話していた。これを見た警備兵が大声を上げて現れた。銃口を私たちに向けたので私は最後まで思ったら、銃口を空に向けて一発。「今度話したら銃殺」と言つて許してくれた。23年に帰国し、父と弟

姉に「今元気で帰った」と報告。父は「よく帰った」と言った次の言葉に「母が死んだ、兄が死んだ」と言つて大きな涙を流していた。私は帰国後に貢献しようと思つた。地域の色々の役職に携わつてきた。

最後に私は子供や孫達に言つているのは「戦争」の二文字は捨て「平和」の二文字を守ることを教えている。



過去の事実は事実としてお互い認め合うこと。その上でこの出来事は水に流す。政治家が、平和について話しあつて頂くことを私は念願する。

平和ボケが心配

釜石市出身・盛岡市在住 洞口 伊章

私は、90歳になつた。若い頃、終戦が近づいたのも知らず18歳で志願、19歳で入隊した。当時、日本が負けるものとは思つてもいなかつた。それから体を鍛えて日本のためになろうとハワイにでも行く覚悟で英語を一生懸命勉強した。

なにしろ当時の国が発表する情報を信じていたのだ。今考えると全く幼かつたと思う。

抑留された収容所は、ハダブラクというところだった。今日お見えになつている山田町の鈴木さんのお兄さんと一緒だった。その収容所では、1004人が抑留され、そのうち481人が死亡した。約半分の戦友が亡くなつたことになる。生きてきた私たちも地獄のような抑留体験だった。

ここで得たのは「この様な悲惨な戦争が二度と繰り返してはならない。残酷極まりない地獄のような非人道的なことを二度と繰り返してはならない。日本人も世界の国々

も教訓として生かすよう決意した」それだけをお土産にもつて無事ふるさと日本に帰国してきた。あれから65年、働いて生活することができた。今幸いにも戦争をせず平和にくらしているため、あの戦争を忘れようとしている。

私に言わせれば、何かあまり平和になり過ぎて、むしろ「平和ボケ」を心配している。

戦争に対する危機意識が薄れているのではないかと。戦争をしないために今日日本が何ができるかという本気になつて考えていかなければならないと思ひ、とても心配している。

戦争は、100%策略行為である。日本もアメリカもロシアもイギリスも中国もどの国もそうだ。今、この日本こそが過去の教訓を生かし、世界平和のために働きかけるべきである。90歳にして最後の願いとして訴えるものである。